

## 心違う「王命婦」と「藤壺」

——『源氏物語』の女房と女君の関係をめぐって——

牧 野 高 子

はじめに 王命婦と藤壺

『源氏物語』に描かれる女房と女君との関係は、物語初期においては主人の代理の視点や言葉を持つ分身として、女房を通して主人の手柄や感情の動きを表現するものであり、女房は「ある場面や筋立てのためにのみ、必要な限りで登場せしめられている」<sup>(1)</sup>存在であった。帚木巻で源氏の侵入に狼狽する空蟬の女房・中将や、夕顔巻で源氏と歌を交わす六条御息所の女房・中将のおもと、夕顔亡き後その素性を語る右近も同様である。未摘花巻に登場する大輔命婦は、人物像や心理描写が詳細に描かれるという面で物語初期の女房としては異彩を放っているが、女君が大輔命婦に対して何かを思ふ描写はなく、女房と女君の関係という枠組みでは捉えがたい。しかしそれに先んじて登場する藤壺の宮の女房・王命婦と藤壺の間において、それまでの女房と女君の関係に変化が表れるのである。その要因として、両者の間に介入する光源氏という男君の存在が深く関わっているよつである。

以下は若紫巻における源氏と藤壺の密会の場面で、仲介者の王命婦が初めて登場する場面である。

藤壺の宮、なやみたまふことありて、まかてたまへり。上のおぼつかながり嘆ききこえたまふ御気色も、いといとほしう見たてまつりながら、かかるをりだにと心もあくがれまどひて、いつくにもいつくにもまつでたまはず。内裏にても里にても、昼はつれづれとながめ暮らして、暮るれば王命婦を責め歩きたまふ。いかがたばかりけむ、いとわりなくて見たてまつるほどさへ、現とはおぼえぬぞわびしきや。宮もあさましかりしを思し出づるだに、世ととも御もの思ひなるを、さてだにやみなむと深う思したるに、いと心憂くて、いみじき御気色なるものから、なつかしうらうたげに、さりとてうちとけず心深う恥づかしげなる御もてなしなどのなほ人に似させたまはぬを、などかなのめなることだにうちまじりたまはざりけむと、つらうさへぞ思はるる。(若紫 一 一三二)

源氏十八歳の四月、藤壺は体調を崩して三条宮に里下がりしていた。帝の心痛をいたわしく思う一方で、藤壺に近く好機と思う源氏は、魂が彷徨い出るばかりに心を乱し、昼は虚ろな物思いをして日が暮れると王命婦を責め立てた。この描写の後に、すぐ「いかがたばかりけむ……」と、手引きが行われたことが描かれる。この密通が成就するまでに源氏が何を言い、王命婦が何を思つてどのよつに藤壺に近づけたかなどの細かい描写は省き、夢のような逢瀬によって思い乱れる両者の心情に照明が当てられていく。この時の逢瀬によって藤壺は不義の子を身籠り、源氏共々罪の意識に苛まれていくことになるのである。

若紫巻における王命婦の登場は唐突で、ここに見る限り、物語の展開を円滑にする役割を担つてこれまでの女房とな

んら変わりはない。しかし王命婦は秘密を唯一知る女房として、以降も密通に関わる藤壺と源氏の交渉の場面にはほとんど登場し、折々にその心情が語られるのである。また藤壺の方もこれまでの女君と違い、王命婦に対して感情の動く描写がある。

先行研究において取り上げられる王命婦の造型は、これまでの女房と同様に主人に付随する者を出ないものの、藤壺と源氏の物語に関わる当事者として個人の心情が描かれる人物であるという、概ね同じ見解である。<sup>(2)</sup> その中でも鈴木祥子氏は、藤壺と王命婦を「ひとつ心」としながらも、両者に感情の齟齬が認められると述べられ、「王命婦は古い物語への『源氏物語』の接点である。『源氏物語』には、命婦以前にも何人かの女房が登場するが、女君とのかわりであらえられるものではない。(略)命婦は『源氏物語』における女君と女房との関係での、女房の側の出発点である」と指摘された。<sup>(3)</sup> 本稿ではこの論を始点として、王命婦と藤壺の心の有り様について改めて見ていくことにより、『源氏物語』が描いた女房と女君の新たな関係について考えていきたい。

## 一 王命婦という人物

「命婦」という官名については、『令義解』<sup>(4)</sup>の「職員令」中務省系に以下の規定がある。

内外命婦謂 婦人帯五位以上。曰「内命婦」也。五位以上妻。曰「外命婦」也。

自身が五位以上の婦人もしくは、五位以上の官人の妻がこれにあたり、前者を「内命婦」、後者を「外命婦」という。平安時代にはこの規定がかなりあいまいになり、摂関期以降は中臈女房の総称となっていたようである。加納重文氏は史実と照らし合わせて、『源氏物語』の舞台となった時代の「命婦」を「次席掌侍とでもいうべき実務女官の性格よりも（略）いますこし自由な、本来の上流社交婦人の性格を残す存在であったと規定された。また平安中期に至る過程に、命婦と乳母が強く結びつく時期があったことを指摘し、上は天皇の乳母に至る朝廷の上層官女の「優遇の具体的措置として、命婦の称号が与えられた」と述べられた<sup>5)</sup>。また岩佐美代子氏は、

物語当時のあり方としては、五位の内裏女官で、公的交渉を主とする内侍の下位にあり、帝・後の日常の着替・食事・入浴等一切の細々とした生活介助に当るのがその任務であった、従って帝・后と最も私的に接近した女房であったと考えられる。

この見解を示された<sup>6)</sup>。王命婦は、「御湯殿などにも親しう仕まつりて、何ことの御気色をもしるく見たてまつり知る御乳母子の弁、命婦などぞ（若紫一 二三三）」と、湯殿に奉仕して主人の万事を把握している女房と紹介される。『源氏物語』に登場する「命婦」には、他に桐壺巻の靱負命婦、前出の大輔命婦などが挙げられる。靱負命婦は桐壺帝の「親しき女房」の一人として故桐壺更衣の里邸を訪れ内意を伝える役を担っており（桐壺一 二二六）、同様に内裏に勤める大輔命婦は、源氏の髪の手入れなどにも気軽に心している（未摘花一 二九八）。また源氏の元服に奉仕する上の命婦（桐壺一 四六）や、絵合の場に登場して物語絵の優劣を競つ「心にくき有職」の女房達の中にも少将・中将・

兵衛という名の命婦が見られる（絵合二 三八〇）<sup>(8)</sup>。『紫式部日記』にもお膳に奉仕する筑前・左京・中務といった命婦の名が見えることから、当時の「命婦」は、主人の生活に深く関わる、主人にとって身近な女房であったといえる。

また王命婦は「王」という候名を持つことから、皇族の血を引く女性であることが分かる。『源氏物語』では王命婦の他に、前斎宮の女房達、宮の君などが皇族の血を引くことが記されている。六条御息所の娘である前斎宮には「離れたてまつらぬわかむどほり」の女房達が多く仕えているとの描写がある。「わかむどほり」とは皇室の血筋を指す語で、『源氏物語』以外にも『宇津保物語』『落窪物語』に例が見える。宮の君は、父である蜻蛉式部卿宮が亡くなった後、継母が自分の兄の馬頭に縁付けようとしているのをかわいそうに思った明石中宮が、娘の女一の宮の女房として迎えている。皇族の血を引く女房は、自らも高い出自であることから女君の傍近く仕えるにふさわしく、高貴な女君と近い視点から物事を捉えることができ、女君の心情を他の女房よりも理解し得る存在だったのではないか。女君にとっても信頼の置ける女房といえるであろう。また彼女達に共通するのは、仕えるのが比較的近い親類関係にある皇女や皇族の女君だということである。前斎宮に仕える皇族出身の女房達は「はなれたてまつらぬ」と近親者であることが明記されているので、前斎宮の父の故前坊（前東宮）の縁で仕えていると思われる。宮の君は、蜻蛉式部卿宮が明石中宮の父である源氏の異母弟なので、明石中宮とは従姉妹同士にあたる。縁故を頼るのは他の貴族の家に仕える女房達にも言えることであるが、これらの例を見ると先帝の四の宮である藤壺と王命婦の間にも遠くない親類関係があったと考えることができる。もちろん王命婦に藤壺との血縁関係等を決定付ける描写がないので断定できないが、吉海直人氏が「乳母子と双壁をなす」者として王命婦が親類の女房である可能性を挙げ、「信頼できる側近であることが納得しやすい」と述べられるように、<sup>(10)</sup>常に身近にいる藤壺と王命婦が、同じ皇族の血を引く者としてより深い

信頼関係を築いていたことを想像する一要素にその可能性も挙げておきたい。藤壺には他に、近侍する女房の一人として弁という乳母の名も見える。乳母は貴人の養い親としてその養育に携わるが、その子供である乳母子もまた主人と主従関係を越えた深い絆で結ばれるようで、物語においても主人の秘密の恋愛に関わることが多いという特徴がある。その乳母子の弁ではなく王命婦が手引きの仲介者選ばれたのも、かつて御簾の内に入ること許され、藤壺の周囲の様子を窺うことができた源氏の目から見ても、王命婦と藤壺の関係が他の女房達と比べ最も密接だったからであろう。

藤壺の懐妊を知った時、王命婦は一人の「なほのがれがたかりける御宿世」を「あさまし」と思っている(若紫一三三三)。「あさまし」とは事の意外さに驚きあきれる様子に用いられる語である。入内してから七年間、寵愛を独占しながら桐壺帝との間には子を成さなかつた藤壺が、源氏との一夜の逢瀬によって身籠ったことを思うと、二人の前世からの因縁の深さを感じざるを得ないようである。しかしこの大それた事態を引き起こした張本人であり、また両者の間に立って一人でそれを隠蔽しなければならぬ王命婦は「いとむくつけつわづらはしさまさりて(若紫一三三三)」「懐妊直後は源氏との接触を避けた。本来ならばもつこれ以上かかわりたくないというのが本音であろう。しかし、

命婦の君に、たまさかに逢ひたまひて、いみじき言どもを尽くしたまへど、何のかひあるべきにもあらず。若宮の御事を、わりなくおぼつかながりきこえたまへば、命婦「なほ、かつしもあながちのたまはすらむ。いま、おのづから見たてまつらせたまひてむ」と聞こえながら、思へる気色かたみにただならず。かたはらいたきことなれば、まほにもえのたまはで、源氏「いかならむ世に、人つてならで聞こえさせむ」とて、泣いたまふさまぞ心苦

しき。……命婦も、宮の思ほしたるさまなどを見たてまつるに、えはしたなうもさし放ちきこえず。

命婦「見ても思ふ見ぬはたいかに嘆くらむこや世の人のまどうてふ闇

あはれに心ゆるびなき御事どもかな」と忍びて聞こえけり。

(紅葉賀一 三二六)

手引きを断られてもなお藤壺に近づこうとする源氏は、見舞いにかこつけて藤壺の許を訪れる。すると傍線部の一文にあるように、対応せざるを得ない王命婦は、藤壺の思い乱れる様子を見ていた。ただ一点のために源氏をそっけなく見放すことができないというのである。この描写からは、厳しい現実の中にあっても主人の気持ちに応えたいという王命婦の姿勢が窺える。後に王命婦は藤壺の出家に際しては自らも出家し、藤壺の死後もその意向に添い、不義の子である冷泉帝の治世に天変地異が起きようとも、実の父の存在を知らずに罪を得ることになろうとも、ついに秘密を打ち明けることがなかった。王命婦の藤壺に寄せる誠意は登場する限り変わることはない。そのことから遡って、密通の手引きという大それた行為でさえも、ひとえに主人のためであったといえるのではないか。同時にこの一文は、苦悩する藤壺の方もまた源氏に好意を寄せていることを示している。王命婦の目には、藤壺の「御気色」が源氏への愛慕の念を湛えているように映っていたのであろう。

## 一一 藤壺の思慕

では、藤壺は本当に源氏に対して特別な愛情を抱いていたのだろうか。王命婦が藤壺から感じ取った源氏への好意

は、はたして男女の情愛であったのか。

桐壺巻において入内した当初より藤壺と源氏は桐壺帝から母子に見立てられ、帝の計らいによって特殊な親交を重ねていた。元服前の源氏は夫人方の御簾の内に入ることが許されていたため、自然寵愛の深い藤壺の姿を目にする機会が多く、また人づてでなく言葉を交わすなどして（紅葉賀一 三二九）母に生き写しという五歳年上の女御に対して親愛の情を抱いていた。しかし十二歳で元服し結婚した源氏は、藤壺を「さやうならむ人をこそ見め（桐壺一 四九）」と、母ではなく理想の妻、女君として認識するようになり「苦しきまで（同右）」恋焦がれていくのである。源氏にとっては永遠の憧れの女性として、その人生さえも規定するほどの存在になっていく。これに対して、密会の場面以前の藤壺の心情は、桐壺巻において、源氏が元服し御簾の内に入ることが叶わなくなってから「琴笛の音に聞こえ通ひ（同右）」と、二人が心を通わせていたことが窺える描写があるのみである。しかしまだ幼い子供を慈しむような気持ちから呼応しているという印象もあり、これが即源氏への秘めたる愛情の表れとは言いがたい。懐妊後は「さすがなることもを多く思しつづけけり（若紫一 三三五）」思ほすことしげかりけり（紅葉賀一 三三四）」など源氏に対して並々ならぬ思いを抱いている様子は描かれるが、そこに愛情が込められているのか、恐ろしい秘密を共有する相手への胸が締め付けられるような心情かは判断しがたい。<sup>(12)</sup>しかし、後に出家した藤壺が源氏への想いを以下のように振り返る場面がある。

年ころは、ただものの聞こえなどのつつまじさに、すこし情ある気色見せば、それにつけて人の咎め出づること  
もこそこのみ、ひとへに思し忍びつつ、あはれをももつ御覧しすくし、すくすくしうもてなしたまひしを、かば

かりにうき世の人言なれど、かけてもこの方には言ひ出づることなくてやみぬるばかりの人の御おもむけも、あながちなりし心のひく方にまかせず、かつはめやすくもて隠しつるぞかし、あはれに恋しうもいかが思し出でざらむ。

(須磨一 一九一)

世評を気にする心から、源氏への「あはれ」を強いて見ないようにしていたと明かし、源氏との往時を「あはれに恋しう」思うのである。これまであいまいであった藤壺の心情に、このような直接的な語が表れたのは、出家して男女の仲らいから開放されたためであろう。ここに表れた言葉こそが、偽りのない心情ではないだろうか。入内以降、桐壺帝に望まれるまま互いに培ってきたのは母子としての親愛の情であったろう。しかし源氏の想いは元服によって恋情へと変化した。源氏が恋心を訴える文を送っても、藤壺が見もしないことは「例の」という語を用いられ習慣化していたことが分かるが、それでもまったく無視するわけではなく、時に「はかなき一行」の返事をすることもあった(若紫一 一三四)。藤壺の源氏への愛情がいつ芽生えたものであったかについても知るすべはないが、激しい恋情に困惑しつつも、一途に自分を想って苦しい胸の内を訴え続ける源氏に、藤壺は少しずつ心動かされていたのではないだろうか。恒常的に文のやり取りをしないことで源氏の想いを制しながらも、完全に拒絶しない姿勢には、源氏の心が離れていくことを望まない気持ちがあるように思える。藤壺は文によって互いの想いを共有し、正式には結ばれるべくもない二人の、心の結びつきを求めていたのではないか。その文の仲立ちもまた王命婦であったことは言うまでもない。

また若紫巻での密会の場面においても、藤壺は源氏を目の前にして強く拒むわけでもなく「なつかしうらうたげ」

な様子を見せている。鈴木日出男氏が「藤壺は源氏を、この場においてさえ、そっけなく突き離そうとしていない。(略)藤壺の源氏に寄せる親情や共感、実は源氏がつけこんだり甘えたりする隙を与えていることになる」と述べられるように、<sup>(13)</sup> 尋木巻で源氏に迫られた空蟬の「すくよかに心つきなしとは見えたてまつるとも、さる方の言ふかひなきにて過ぐしてむと思ひて、つれなくのみもてなしたり(尋木一〇〇)」という気強さと比較すると、やはり藤壺には、以前から源氏に寄せていた愛情ゆえに、目の当たりにして冷淡に扱えない心の弱さがあったことが感じられる。

### 三 くい違つ心

密会の場面での藤壺の描写から、実は源氏との逢瀬がすでに一度あったことが明かされており、一度目の逢瀬もまた王命婦の関与があつたと推察される。「何」ことの御気色をもしるく見たてまつる「王命婦は、日常に表れる藤壺の態度から源氏への愛情を感じ取り藤壺の許に源氏を導いたのである。後述するが、懐妊後の藤壺は王命婦を警戒することで密通を回避している。それならば、「さてだになみなむと深う思し」ていながら、一度目と二度目の密通の間には明確な回避策をとらなかつたことになる。藤壺の王命婦への態度が変わらなかつたことを考えると、一度目の手引きは、物越しにでも直接想いを語り合わせたいと図つたつもりが、源氏の暴走によって密通にまで発展してしまつた。王命婦にとつても以外な出来事だつたのかも知れない。しかしその後藤壺が沈黙したことによって王命婦がそれを手引きの容認と取り、主人が再び源氏に逢うことを望んでいると確信したために、源氏の訴えに応じる形で再び導いたのではないか。王命婦には主人と自身が「ひとつ心」であるという自負があつたのだらう。分身としての役割を担つ

て登場していたそれまでの女房と違い、王命婦には主人の気持ちに添おうとする思いから行動を決定していく意志が感じ取れるのである。

しかし当の藤壺は、決して源氏への愛情に突き進んでいくことはできない。出家後の述懐や、若紫巻の密会の場面における二人の贈答歌、源氏の「見てもまたあふよまれなる夢の中にやがてまぎるるわが身ともがな」と藤壺の「世がたりに人や伝へんたくひなくうき身を醒めぬ夢になしても」(若紫一 二二二・二三三)がそれぞれの気持ちをよく表しているように、源氏が「夢の中」に惑う逢瀬の間も、藤壺は決して理性を失うことはなく、世間の中での自分の立場を忘れることができないのである。『源氏物語』の登場人物は、おしなべて世間を意識する心が強く、藤壺が何より恐れるのも、密通の露見によって我が身が「身のいたづらに(紅葉賀一 三三五)」なることであつた。「身のいたづらになる」は、「恋歌にも頻用され、恋ゆえの無駄死、道ならぬ恋によって社会的生命を失う意を表わす場合が多い」<sup>(15)</sup>語である。帝の寵愛を二分する自分達の密通など、世間にとっては格好のスクヤンダルである。高貴な出自であるだけに、社会的地位を奪われ、人々の好奇の目にさらされていかなければならないことへの恐れは並々ならぬものであつた。源氏にひとかたならぬ愛情を抱きながらも、藤壺は常に帝や世間にこの関係が知られることを恐れているため、直接の接触についてはあるまじきことと望んでいなかったのではないだろうか。王命婦が源氏を導いたことは主人の気持ちに従つたと信じたものでありながら、実は盲目的に恋の道を突き進む源氏と同じ、恋だけに目を向けた浅はかな行為で、お互いの立場を第一に考える藤壺の真意とは違つたものだったといえる。しかし藤壺もまた、一度目の密通によって逢瀬を重ねることの危つさを身に染みて感じながら、手引をした当事者の王命婦にその気持ちをはつきり伝えなかつた。身の破滅につながりかねない秘密であるだけに、他の女房達の侍る日常では口に出せるはずもな

く、湯殿においても秘密を知らない乳母子の弁が控えていたため、遂にその機会が訪れなかったのかもしれない。しかし藤壺はこれまで信頼関係を築いてきた王命婦であったからこそ、敢えて示さなくても真意が伝わり、これ以上の手引きはしないと信じていたのではないだろうか。両者はそれぞれ沈黙しながら互いの気持ちを押し量っていたが、視点の違う個々の人物であるがゆえに完全に合致するはずもなく、王命婦の行為は結果的に藤壺の意に反したものになってしまったのである。

#### 四 藤壺の決意

宮も、なほいと心憂き身なりけりと思し嘆くに、なやましさもまさりたまひて、とく参りたまふべき御使しきれど思しも立たず。まことに御心地例のやうにもおはしまさぬはいかなるにかと、人知れず思すこともありければ、心憂く、いかならむとのみ思し乱る。暑きほどはいとど起きも上がりたまはず。三月になりたまへば、いとしるきほどにて、人々見たてまつりとがむるに、あさましき御宿世のほど心憂し。

(若紫 一 二三二)

さるは、いとあさましうめづらかなるまで写し取りたまへるさま、違ふべくもあらず。宮の、御心の鬼にいと苦しく、人の見たてまつるも、あやしかりつるほどのあやまりをまさに人の思ひ咎めじや、さらぬはかなきことをだに疵を求むる世に、いかなる名のつひに漏り出づべきにか、と思つづくるに、身のみぞいと心憂き。

(紅葉賀 一 三三六)

密会の場面を含め、源氏との逢瀬や罪の証となる若君の誕生に際しては、藤壺は「あさまし」「や」「宿世」「憂し」「心憂し」を多用する。鈴木氏はまた、

藤壺の「憂し」はもともと、自分自身のせいであらう、という語感で、おおむね宿世を前提に己が恵まれぬ運命を痛恨する気持ちを表す。また「心憂し」もここではそれに准ずる用法であり、藤壺は己が現実をきびしい運命のしわざとしてとらえている。

と述べられる。<sup>(16)</sup> 源氏の妄執も、愛情を抱いてしまったばかりにそれを完全に拒絶することができなかった自らの心の弱さも、子を身籠ったことも、すべて拙い運命であったと藤壺は自責の念に苦しめられ続けるのである。しかし身に降りかかる現実を全て「宿世」と諦めて今後と同じ過ちを繰り返していけば、必ず秘密の露見する時が来るであろう。懐妊という目をそらしようもない出来事を期に、藤壺は源氏との直接の接触を避けるべく行動し始める。

命婦もたばかりきこえむ方なく、宮の御気色も、ありしよりはいとどつきふしに思しおきて、心とけぬ御気色も  
恥づかしういとほしければ、何のしるしもなくて過ぎゆく。はかなの契りやと思し乱ること、かたみに尽きせ  
ず。

(紅葉賀一 三二九)

命婦をも、昔思いたりしやうにも、うちとけ睦びたまはず。人目立つまじう、なだらかにもてなしたまふものか

ら、心づきなしと思す時もあるべきを、いとわびしく思ひの外なる心地すべし。

(紅葉賀一 三三七)

かつて気を許して慣れ親しんでいた王命婦に対して、本人だけにそれと分かるように不快な態度を表し警戒する様子が、特に三条宮に退出している時に描かれる。宮中に比べて密通の好機であることは、若紫巻において密会を遂げるまでの源氏の惑乱ぶりや、紅葉賀巻で再び三条宮に退出した際に「例の、隙もやとつかがひ歩きたまふ(紅葉賀一 三一六)」と足繁く通う様子から、また後の賢木巻で源氏が単独で侵入したのも三条宮であったことから窺うことができる。二度目の手引きが行われたことで、源氏との逢瀬を「さてだにやみなむ」と思うだけでは伝わらないことを思い知らされた藤壺は、これ以上の過ちを阻止するため、危険な場所では特に自分のできる精一杯の手段で状況を打開しようとする。女房の動向を意識し、それによって自らの処し方を決めるのは、『源氏物語』で初めて見られる女君のあり方である。

王命婦もまた、藤壺の態度によって自らがそうと信じてきた主人の願いが実は過剰な思い込みであったことを痛感するに至る。「恥づかし」という思いからは、自分の浅はかさに引け目を感じる気持ちが見て取れる。主人の気持ちに忠実であろうとする王命婦は、これ以降は源氏がいくら訴えても決して手引きに応じることはない。

王命婦に対する藤壺の「心づきなし」という態度は、「ひとつ心」と信頼していた王命婦が自分の複雑な思いを最終理解することなく、二度までも源氏を導いてきたことに対する避難の現れであろう。そのような主人の様子を目にし、王命婦は傍線部「いとわびしく思ひの外」と感じる。「思ひの外」という語は『源氏物語』には五十四例見えるが、心内語に用いられる場合はいずれもまったく思いもかけないという意味で用いられており、王命婦もまた同様であると

思われる。この話からも、彼女にとって源氏を導くことと主人との信頼関係を維持することは何ら矛盾することではなかったことが分かる。だからこそ、藤壺が自分を警戒するのを切なく、こんなはずではなかったのと思うのである。

### おわりに

王命婦は、常に主人の気持ちに添おうとする姿勢を見せていた。源氏に対して寄せられる同情も見られるが、決して源氏を賞賛する心から導いたのでないことは懐妊後の姿勢からも分かるし、王命婦が感じていた、藤壺の源氏への愛情にも間違いはなかった。しかし常に理性を失わずにいた藤壺の真意は、不義の子を身籠るに至るまで王命婦に伝わることはなかったのである。

主人の分身として現れた『源氏物語』の女君と女房の関係は、王命婦と藤壺において初めて両者の心情がくい違ってしまう変化を見せた。女房が男君を導くという行為が描かれることによって、それを甘んじて受け入れることができないう女君との間に必然的に新たな関係が要求されたのである。重大な密事の当事者として折々に描かれた心情からは、王命婦の思惑が図らずも藤壺を離れ、それが原因となって藤壺と源氏の物語が展開した様子が、そしてその心の離れを両者が意識し、さらに王命婦に触発されて藤壺が身の処し方を選び取っていく姿が読み取れた。

男君の介入によって女房の思惑や言動が女君の身の上や内面に重大な影響を及ぼし、また男君との結婚を望まない女君との間にすれ違いや衝突が生じる様子は、独身を通そうとする朝顔の姫君に対して源氏を賞賛する女房達、落葉

の宮と夕霧の板ばさみになる少少将の君、薫との結婚を執望して宇治の大君と対立する弁のおもと達など物語が進むにつれ頭になるが、そのような以降の女房と女君の関係の片鱗を、王命婦と藤壺の関係に見ることができるのである。

本文の『源氏物語』の引用は、小学館『新編日本古典文学全集』による。引用文の後の（ ）内は、巻名・巻数・頁数を表わす。また、必要な箇所には私に傍線を施した。

注

(1) 秋山虔「女房たち」(『日本古典鑑賞講座 第四巻 源氏物語』角川書店 昭和三十二年 『鑑賞日本古典文学 第9巻 源氏物語』角川書店 昭和五十年)

(2) 王命婦については、秋山虔氏が、これまでの女房と異なり「光の心に立ち入り、また藤壺の思いに同じて悲喜哀歡を分け持つ人物として描かれている」と述べられる一方で「あくまで藤壺物語に従属する人物像であり、源氏と藤壺との特殊な関係が要請したものである以外の何ものでもない」と述べられる(同右)。清水好子氏は、王命婦を、唯美主義を支える「若き女房」の一人とされている(『侍女たち』塙新書7『源氏の女君』塙書房 塙書房 四十二年)。篠原昭二氏は、「主人公とあまりに近いが故にかえって独立性を持たず、主人公に付属するものとしてのみ存在する」と述べられる一方で「命婦の存在なくして光と藤壺の関係は成立しなかったことは全く別次元において、命婦は物語世界に存在している」描写があると指摘される(『作中人物の眼と心と行動と』『国文学解釈と教材の研究』第二十二巻一号 昭和五十二年一月)。原田真理氏は、王命婦は密通に関して第三者的な感想しか抱いておらず「個性を持った人物として描かれなかった」と述べられる(『平安文学研究第七十八号 昭和六十二年十二月)。加藤宏文氏は、王命婦という人物がどのような語彙と視点に支えられているかを考察し、その独自性を、同様の立場にある女三の宮の女房・小侍従と比較されている。王命婦は「たはかる」という行為そのものが重要であり、内面はそつげなく、傍観的であり、詠歌の場面においてとりわけ草子地と接点を持たされていると指摘される。藤壺物語という「秘事」が秘事として、第二部へとつながり出して行くために「草子地による自制や方向転換によって王命婦の心

情の活写を避けると述べられる。「王命婦から小侍へ」「かくるへ」と「展開の視点」『源氏物語作中人物論集』、勉誠社平成五年）。

- (3) 鈴木祥子「源氏物語の女房たち」、『言語と文芸』第六十一号 昭和四十三年十一月
- (4) 国史大系『令義解』国史大系編集会 昭和五十六年
- (5) 加納重文「命婦考」、『平安時代の歴史と文学』文学編 吉川弘文館 昭和五十六年
- (6) 岩佐美代子「二人の命婦」、『源氏物語の展望』第三輯 三弥井書店 平成二十年
- (7) 名だけの登場では源氏の乳母子の少将命婦（夕顔）、赤鼻の左近命婦（未摘花）が見られる。
- (8) 新潮日本古典集成『紫式部日記』新潮社 昭和五十五年一月
- (9) 『源氏物語』では他に、内大臣の娘の雲居の雁が「わかんどほり腹（少女三三三）の姫君であることが語られ、また宇治八の宮の娘でありながら娘と認められなかった浮舟が、薫から「なまわかんどほり（夢浮橋六三七八）」と呼ばれる。『宇津保物語』にも、あて宮の若君の「御乳母三人、一人はわかんどほり、二人は大弐の娘（あて宮一五三三）」という描写があり、『落窪物語』は、主人公落窪の君が「わかむどほり腹」であることが語られる。
- (10) 吉海直人「親類の女房」、『致』、『日本文学』vol.49 平成十二年三月
- (11) 源氏と惟光、夕顔と右近、雲居の雁と小侍従、女三の宮と小侍従、柏木と弁のおもと、浮舟と右近など。
- (12) 木船重昭氏は、藤壺の心情を表わす語をさまざまな注釈書や用例と照らし合わせ、源氏への愛情を否定されている（『源氏物語の研究』続 大学堂 昭和四十八年）。阿部秋生氏は、藤壺の心情の描写を詳細に検証され、これまで源氏への思慕と思われていた描写が、必ずしもそう読み取れないと指摘された（『藤壺の宮と光源氏』、『文学』平成元年八・九月 人物で読む源氏物語 第四巻 藤壺の宮 勉誠出版 平成十七年）。これに対し鷲山重雄氏は、あいまいな表現にこそ藤壺の秘めた思いを認めたいと述べられた（『物語作中人物論の可能性 源氏物語藤壺宮を例に』研究講座『源氏物語の視界』3 光源氏と女君たち、新典社 平成八年）。
- (13) 鈴木日出男「天上の恋 藤壺と光源氏（一）」、『源氏物語虚構論』東京大学出版会 平成十五年
- (14) 山本利達「拒否の心情 源氏物語の女性について」、『京都大学国文学会編『国語国文』第三十八巻第二号 昭和四十四年二月

- (15) 鈴木日出男 「藤壺の出家前後 藤壺と光源氏(二)」 『源氏物語虚構論』 東京大学出版会 平成十五年
- (16) 前掲注(13)

(まきの・たかこ/平成十五年本学大学院修了生)